

シェアサイクルと日本のこれから No.20

若者の仕事と生きがい

文

元 国土交通省 自転車の道を担当
現 国土交通省 総合政策局 公共事業企画調整課 室長

森若 峰存

一般社団法人 日本シェアサイクル協会
事務局：TEL 03-3663-6281 URL <http://www.gia-jsca.net>



1. 自転車に心惹かれる

9月にオープンした商業施設「銀座プレイス」は銀座四丁目交差点に面する。その日産ショールームの窓ガラスに映る光の流れと、人垣の中心にある未来のクルマを目にした瞬間に「色合いよく肉感的で良い」と感化され、憧れた。実物には、理屈では説明しがたい力がある。

子どもの私は、自力で成し遂げる喜びや失敗を経験し、パンク修理などの大概の自転車に関する技術を身につけた。自転車は乗り物でありながら、分解と組み立てを繰り返すオモチャ的な存在だった。自転車と一緒に心がいっぱいになった。夢中になった。塾帰りの真っ暗な道も雪降る夜道も一緒。親友であり自分自身。

父母の世代までは、自らの手で生活に必要な品を生み出した。母は、服をつくって、私たちに着させてくれた。工夫や知恵をはたらかせて、じつに上手につくった。家事をして、たくさんの点字の本を夢中でつくった。つくことは生きる力であり、生み出すことは生きがい。

2. 自動運転に期待

自動運転には、移動性や安全性の向上にとどまらない可能性がある。シートに座るだけで血液成分が自動測定されるならば、その蓄積データを手がかりにして、不治の病だって、医者いらずに職を辞めることなく、治療できるかもしれない。こんな健康車両ならば、地域で共有され、行政手続きや現金引き出しを車内でできちゃうかもしれない。ドローンや通信技術などのさまざまなモノとソフトとの組み合わせがなされることにも期待。

地区の環境改善にもつながります。自動運転で交通量の削減が叶えば、人優先な地区につくり直すきっかけになります。具体的には、道路や公園などの共用空間が

見直され、歩行者や自転車をもっと安心して通行できて、シニアカーやセグウェイのような新しい乗り物が自由に走れるようになるかもしれない。野菜を植えることやドックランにもできる。バリアフリーな道を、安全安心に歩いて、休憩をしながら、駅やレストランにたどり着けるでしょう。都心全体を公園広場にも……。

人は大病や骨折をする時もあります。そんな時には車椅子や松葉杖の練習場所にもなれる。子どもが鬼ごっこやラジコンや自転車のパンク修理ができたり、大人たちは夕涼みの将棋ができるのも、そこで暮らす魅力になる。

3. になりたい職業がわからない若者たち

子どもの私は、近郊の新興住宅地に住んでいたから、町工場のような仕事場は皆無だった。実家を出てごちゃっとした地区に住むと、多くの職業があることがわかった。竹細工職人の作業風景を垣間見て「私もやりたい!」と直感したり……。叔父などの親戚には公務員や農家ばかりだったことも、私が職業を知らなかった理由だろう。

になりたい職業がわからない若者がいる。知っている職業が少なすぎることも理由。親は苦勞をさせられずに育てられ、その親の子育ても苦勞をさせないと聞いた。そんな親子は苦勞のない安定している就職先を望みし、親の望まない選択はしたくない。知っている職業が少なく、人と疎遠だから、職業の選択肢は少ない。知らないから、きっかけもない。

学生さんから「自転車の仕事をしてみたい」という話をいただくことがある。“自転車で何をしたいの? つくりたいの? 駐輪の関係?”と私は疑問に思うけど、言葉を飲み込む。自転車が身近にあって楽しかった思い出が、職業選択において自転車を思い浮かべた理由なのだろう。

4. ぶれずにつなげる自転車指向

コミュニティサイクル(CC)は観光やビジネスなどの面で伸びるでしょう。その場その時の状況に応じてポート(自転車貸出拠点)の位置や運用を柔軟に変化させて伸びる。ビッグデータを活用すればリアルタイムな需要予測と運用が可能になる。システム設計、再配置作業、メンテナンスというばかりではなくて、仕事の細分化がより一層進むでしょう。加えて自動運転などの新しい仕組みや新技術との融合も進むでしょう。しかし、どのようなになったとしても、自転車には自転車好きが携わってほしい。自転車という柱が産業界に意欲的に立ち続けていてほしい。他の産業に囲われてはいけない。

毎回の護摩焚きに参加している。参加者の顔ぶれは様々。炎が立つと、邪気は退散、心身が浄化される。場所を移してのご住職による法話の段になれば、心は穏やかになる。軽くなる。災害や争いが多いご時世だから法話は厳しい内容になるのは必然だけれども、子ども連れが多いことや寺の改修や仏像の修復が進んでいることに加えて、何よりもご自身のご子息の荒修行が明けたこともあって、ご住職の様子は穏やかだ。若い後進につながることは大切だと感じた。生かされていることも感じた。

5. 若者の生きがいを考える

自転車は若者の心を掴んでいるから、CCのポートは若者のキャッチポイントになる。例えば、ポートでのプロの作業を効果的に見せれば、感化される若者もいるだろう。日本人は、微妙な色合いの違いを感じ、心遣いと察する力がある。カラフルな自転車は、持ち主のゆとりの現れ。街にオシャレや野性的な自転車が増えたと実感。車道走行が増えた。私はワクワクさせられる。それは、自転車の所有や利用スタイルの多様化個性化の進展や、ニーズに対応しようとする意欲を感じるから。

自転車に携わる会社間での人事交流とか、複数社を渡り歩くキャリアパスとか、介護問題などのやむをえない事情によって人生設計の見直しに迫られた職員の人材マッチングとか……。そのような仕組みは他産業への人材流出を防ぐ。多数社が参加した多様な雇用対策は若者の定着に役立つ。このような若者を獲得する行動は短期的な営利とは逆行するし、会社毎に待遇と処遇が違ってしまうけれども、将来のために、是非、広

報やグッドデザイン化の活動を含めて、可能な範囲で効果的な対策を講ずるべき。CCの自転車やポートは人目に付くから、それを生かした“見える化”を図って、若者を自転車の仕事に引き込んではいかがでしょうか。例えばきっかけはCCで就職して自転車に携わったのだけど、数年後には自転車のシステム設計の会社に転職するようなキャリアパスです。

前述の日産がクルマで未来を強く印象づけるように、案外と人の幸せとか将来への希望とかいうものは物への関心に依存している。それは、おしゃれな服があればそれを着てみたいとの憧れのように、よい印象の自転車があるならばそれに関わりたいと願う。

定職に就かない引きこもりがいる。電車に乗ることを恐れる若者が多いと、私は感じる。車内は緊張する。自由すぎるオヤジは近くにいてほしくない。男の私でもチカンや蛮行野蛮に恐怖する。バスの支払いにまごついてしまって、どやされたことがある。それは子どもの頃の経験だけど、心の傷は癒えていないから、今もビクついてしまう。自転車ならば、どんなにか心が解放されるだろう。CCが引っ込み思案を救ってくれている。自由気ままさを理由に、利用している若者は多いだろう。今自転車に乗れるのは大人たちのお陰、スマホいじりができるのも働く大人たちの開発や生産や宣伝などの努力のお陰。お陰様なことも若者には理解させなければならない。

大人は、若者が夢中になれる生きがいを考えてあげなければならない。共に働きたいと思える若者と出逢いたいと願い、共に生きる努力をすること。世話をしすぎてもいけない。自転車の修理や整列や清掃などは利用者のことを第一に念頭に置いて作業しているし、作業を終えるたびに充実感を得られる。感謝の言葉をいただくこともある。作業は自分の存在を自分に問いかけることでもある。利用されている場面を一心に想像して無心に手を動かしている。自転車に携わる者はじつに明るくて世話好きな性格が多い。もっと自転車を通じて社会のお役に立ちたいと願ってほしい。CCは、新しい移動手段にはとどまらず、自転車活用の可能性をもっと広げている。自転車の新たな事業展開は雇用を増やす。再開発などの新たな投資があれば必ずCCも関わるでしょう。向上心を持ち、輝いて露出して自転車が暮らしに役立っていることを情熱的に発信してほしい。「CCで儲けよう」はもちろんだけど、常に挑戦者で、偏狭に陥らず、産業の活性化を牽引してほしい。 PP